

今田秀作著

『パクス・ブリタニカと植民地インド——イギリス・インド経済史の〈相関把握〉——』

京都大学学術出版会 2000年 vi+458ページ

わた なべしやう いち  
渡 辺 昭 一

I

英印関係史に関する久々の大著の発刊である。本書は、著者の今田氏がこれまで発表してきた論文をもとに書き下ろしたものである。19世紀のインド経済史領域を取り扱い、イギリスのインド支配の実態と本質を世界市場発達史のうちに位置付けようとした意欲的な書である。

日本国内における英印関係史に関する研究は、戦前の矢内原忠雄氏の先駆的研究を起点として、戦後においては東インド会社の活動を取り上げた西村孝夫氏、浅田実氏、そして浜渦哲雄氏、イギリスの対インド資本投資を取り扱った角山栄氏、世界市場の視点から土地政策から政治思想まで幅広く取り扱った松井透氏、綿関税政策および財政政策を検討した吉岡昭彦氏、幣制問題を検討した井上巽氏らによって手がけられてきたが、その後19世紀前半期の本国費問題を取り扱った松本陸樹氏の研究を除いては、英印関係史の問題を発展的に継承した研究書はない。インド史研究それ自体は膨大な研究蓄積を持っているが、英印関係史を扱った研究は、その重要性を指摘されながらも非常に限られてきたのである。その意味で本書は、まさに待望の一冊といえよう。

まず、本書の構成を示しておきたい。

序章 インド植民地支配史研究に関する方法論的考察：本書の課題と方法  
——M.D.モリスとインド・ナショナリスト史家との論争を中心として——

第1部 産業革命期イギリス東インド会社の動態とインド支配体制の展開

第1章 総督ウェルズリによる英領インド帝国の建設と貿易独占権修正

第2章 1800年前後における東インド会社経営論争

第2部 西部インドにおける地稅政策の展開と農村社会經濟構造の変容

第3章 植民地化に先立つ西部インド農村社会經濟構造の特質

第4章 19世紀中葉ボンベイ管区における地稅政策の展開

第5章 植民地期西部インド農村社会經濟構造の変容

第3部 植民地インドにおける綿花開発と世界市場統合

第6章 インド綿花開発における諸困難と開発の本質

第7章 農民的商品經濟の發展と国内綿花流通構造の再編

第8章 綿花・綿製品市場構造の再編と現地綿工業の動態

第9章 インド産綿花貿易における国際的商業・金融組織の変容

終章 19世紀インド植民地支配の本質と世界史的意義——総括——

このように本書は、序章において本書の課題と分析方法を確認した上で、3部構成をとり最後に総括の章を設けている。総ページ数458ページという大著であり、紙面の関係上内容を詳細に検討することは不可能であるため、この構成に従って骨子を紹介しつつコメントを述べてみたい。

II

まず、本書の課題と分析方法について、著者は、1960年代末に展開されたインド経済史研究をめぐるの論争のなかにそれを見出している。経済成長論に則ったモリス (M.D.Morris) の近代化論とインド・

ナショナリストのチャンドラ(B.Chandra)の植民地国家論とイギリス支配本質論に言及し、次の2点を確認する。すなわち、ひとつは、植民地期のインドでは経済的発展が見られたかどうかについてである。著者は、19世紀インド経済は急速に発展したという見解に否定的であり、「封建社会から資本主義社会への移行」という基本線に沿って具体的かつ実証的分析作業を必要とすることを確認する。もうひとつは、イギリス支配の本質のとらえ方についてである。モリスが発展的・促進的支配と無媒介的に捉え、チャンドラがイギリス政策意図の貫徹と捉えていることに対して、両者とも「イギリスの支配政策意図および支配政策の形成——現地からのレスポンスにも規定された支配政策の展開——特定の客観的構造変化という、インパクトとレスポンスとの絡み合いを含んだ一連のプロセスとして、イギリス支配の展開過程を分析することがなかった」(20ページ)と批判する。

さらに議論を精査するために、著者は、イギリス支配のインパクトという場合に、支配政策の形成過程に焦点を合わせることの有効性を指摘し、さらにその形成過程の「基本的政策志向」は、イギリス資本主義の構造的特質を反映したものとならざるをえないことを確認して、これまでのインド植民地支配史研究が、この点をかなり曖昧に処理してきたことを痛烈に批判する。通説では「基本的政策志向」の担い手を「イギリス産業資本の利害」と漠然と措定してきたこと、並びに近年のジェントルマン資本主義論において対インド支配の実質的支配利害は18世紀末以降台頭するイギリス産業資本階級ではなく、一貫してジェントルマン階級であったという新たな問題提起を受けて、著者は、支配的資本の実体について再検討すべき必要性を主張する。

以上から明らかなように、著者は、インド植民地支配の本質を「イギリス資本主義と植民地インド経済との相関＝イギリス・インド経済史の相関」に見出しつつ、特定の政策の展開に伴う「基本的政策志向—政策実体—政策の帰結」という一連のプロセスの分析を通じて明らかにしようとしている。そして、その分析内容をイギリスを中心とした世界市場編成

(ボックス・ブリタニカの基礎構造)の創出・変容過程という側面から新たに解釈しようと努めていることに注目すべきである。英印関係史に関わる研究方法を改めて整理したことをまず本書の功績としてたたえたい。

## III

では次に3部構成の内容についてみていこう。

第1部は、イギリス東インド会社の動態変化の本質を解明することを主たる課題としている。イギリス資本主義の構造変化に伴って、インド支配の中心にあった東インド会社の変質していった過程をイギリス政府の「基本的政策志向」との関連で明らかにしている。著者は、本国政府がアダム・スミス流の自由主義路線を遂行するどころかますます暴力的支配を行ったこと、並びにイギリス東インド会社が産業資本の台頭により没落したのではなく相互に補完しあう関係にあったことを指摘して、通説のイギリス東インド会社像へ修正を迫っている。史料に基づいた説明は非常に説得力がある。しかし、ここでの議論は1813年までの考察に終始し、それ以降の文字通り東インド会社の権益が縮小していった過程については言及がなされていない。イギリス東インド会社が貿易上の特許状廃止に伴ってインド統治それ自体へ特化していった過程を、イギリス産業資本と富の収奪階級との利害関係を踏まえながら、イギリスの政策を検討する必要があったのではあるまいか。

第2部は、インド植民地支配全体において極めて重要な位置を占めた地稅政策の展開を取り上げている。地域によって地稅制度はかなりの偏差を伴ったことを前提として、地稅政策がボンベイ管区の農村社会構造へいかなる影響をおよぼしたのかを、世界市場への統合過程との関連で明らかにしている。「タルクダール村落」、「分有村落」、「コート村落」の3類型にみられる剰余生産物の収取関係を検討しつつ、さらに地稅の査定方法などを分析した上で、ボンベイ管区の地稅制度改革は、世界市場化の経済構造への適合において、ある程度成功したと結論付ける。西部インド農村社会構造には封建的要素が根強く存

在しているため、地稅制度改革と鐵道建設がその解体要因として重要な役割を果たしたという。ただし、その解体テンポは非常に緩やかであったことを力説する。なぜなら租稅収奪はむしろ封建的土地所有構造を前提として、社会秩序の安定に支えられたスムーズな徵稅を要請したからと説明する。しかし、近代化の産物である鐵道が、いかに地稅政策を通して農村の解体を促したかについては残念ながら分析はない。非常に惜しまれるところである。

第3部は、イギリス綿業資本の強い要請を受けて、植民地政府によって推進された綿花開發政策の展開とその帰結を検討している。ここでは、農民經營構造、インド国内の流通・金融・市場構造、そして世界的な流通・金融・市場構造の3つの構造に着目し、それぞれの領域におけるイギリスの政策を比較検討するという方法が採られている。外国産綿種の栽培強制には失敗したが、インドの綿花生産は、19世紀末においてイギリス向け輸出の停滞によって影響されたにもかかわらず、国内綿工業による消費などによって一貫して増加していること、およびイギリスからの綿製品の輸入とインド国内綿工業が高級品と低級品の棲み分けを行っていたことなど、興味深い指摘がなされている。しかし、著者の分析視角からして、イギリス向け輸出がなぜ停滞しているのか、ランカンチャーにおける綿工業による関稅引き下げ要求がなぜ展開されたのかについても検討する必要があるのではなからうか。また、著者は、綿花栽培の停滞とそれに起因する小麦栽培へのシフトを明らかにしている。この点も世界市場との関連において的を射た指摘であるが、インド産小麦の世界市場における戦略と位置についても言及がほしいところである。たとえば世界市場の構造との関連で考えるのであれば、價格体系、輸出先をめぐる競合關係などのほか、1870年代初頭以降のルピー為替相場下落がインドの一次産品輸出を有利にしたことも考える必要があろう。

さらに、「19世紀後半における植民地銀行の進出と荷為替信用制度の發展」(416ページ以下)において、インドの信用拡大がイギリス植民地銀行を中心として整備されていったことが指摘されているが、この

点についても詳細な分析がほしい。19世紀前半の荷為替信用制度の發展については、徳永正二郎氏の研究が先駆的研究として存在するが、19世紀後半に関しては残念ながら研究が手薄になっている。その意味で著者の指摘は重要であり、具体的な分析がほしかったところである。

## IV

最後に、評者の問題関心から全体に関わる疑問点を3つ述べたいと思う。

第1は、「封建社会から資本主義社会への移行」に関する問題についてである。本書の課題のひとつに、インド社会經濟構造の推移をこの基本線に沿って理解することを挙げているが、著者は、結論について明言を避けているように思われる。地稅制度改革の分析からのみその過程は非常に緩やかであったということなのであろうか。著者の明確な考えを示してほしかった。

第2は、19世紀の対インド支配における支配的資本についてである。既に指摘したように、「基本的政策志向—政策実体—政策の帰結」という一連のプロセスを辿りそこに含まれた諸特質をまとめながら、同時にこのプロセスとイギリス・インド両者の經濟構造及び世界市場編成との間に結ばれていた様々な相互規定關係に整理を加えていることに、本書の最大の特徴があった。その分析過程において、著者は植民地支配の起動力となった基本的政策志向として次の4点を確認している。(1)治安維持を中心とする社会秩序の安定=植民地支配自体の維持、(2)植民地統治権限の草の根への浸透、(3)インドからの富の収奪の維持・拡大、すなわち植民地政府による租稅収奪の拡大、世界市場向け輸出品の確保・開発にもとづくインド貿易黒字の維持・拡大、(4)本国産業資本の利害に沿ったインド産業構造の編成替え=インド販売市場化および原料供給地化=英印間農工國際分業關係の拡大・進化。この4つの方向が複合的に重なり合いつつ、特に(3)、(4)が基本的政策志向を強く規定したという(437ページ)。重商主義的国家体制は、確かに送金利害關係者に主導されるインド収

奪体制を創出したものの、産業革命の進展に伴ってインド販売市場・原料供給地化を目指す政策志向が展開され、「インド収奪利害は、産業資本利害を基軸に据える19世紀中葉イギリス資本主義に対して、その構造的一環に定置された」(133ページ)と主張する。この主張は、従来の研究史上の見解を踏襲して、P・J・ケインとA・G・ホプキンズのジェントルマン資本主義論を真っ向から否定する考えである。産業資本の利害が重要な役割を果たしたとする著者の見解には、評者も大いに賛同するところであるが、その役割についてはもっと多面的に検討する必要があるのではないだろうか。なぜなら1858年に二重統治体制から直接統治体制に転換したことの歴史的意義を考えるべきであるし、さらにイギリス産業資本の利害が政府のどの政策に深く関わっているのか、各政策について具体的に検討すべきであり、またどの時期にどのような要求がなされ、どう実現されたのかを、総合的かつ段階的に検討する必要があるからである。イギリス政府が展開した諸政策を総合的に把握し、著者が提唱する政策的志向と政策の実現過程を突き合わせた上で、初めてその客観的状況を把握されよう。

第3は、3部構成の相互連関についてである。第1部「産業革命期イギリス東インド会社の動態とインド支配体制の展開」、第2部「西部インドにおける地税政策の展開と農村社会経済構造の変容」、第3部「植民地インドにおける綿花開発と世界市場統合」から明らかのように、本書が取り上げているテーマは、1813年までのイギリス東インド会社の動向、ボンベイ管区的地税政策、綿花開発問題と非常に限定

されている。さて、この3つの構成がいかなる有機的關係に置かれているのであろうか。終章において、著者は総括的見解を述べているが、イギリスの対インド支配に関する世界史的意義に言及しているものの、3者の関係については依然として明らかにしていないように思われる。また、表題に「パクス・ブリタニカ」という言葉が使用されていることからすると、インド国内の現実過程との相関関係を踏まえながらもイギリス側からの分析に力点が置かれていることがわかる。しかし、マンチェスター綿業資本の政策的要求、並びに具体的な政策の立案・審議過程がほとんど分析対象から外されている。また、検討されている政策分野が限定されているにもかかわらず、イギリスの対インド支配全般に関わる規定がなされていることもやはり気になる点である。今田氏の分析方法に関して評者もほぼ同じ見解を持っている。ただ、取り上げられた分野が限定されているにもかかわらず、対インド支配の全体構造の特質に一気に言及された感じがしてならない。

以上、評者の関心に引き寄せて本書の特徴をみてきたが、著者の意図するところを正確に示しえなかったり誤解をしている箇所もあるかもしれない。その点はどうぞご海容いただきたい。いずれにせよ、英印関係を単に2国間の問題としてではなく世界史的視野において捉えようとした本書は、新たな見解をいくつも提示してくれた。歴史学徒は、大いに興味をそそられるはずである。ぜひ一読をおすすめしたい。

(東北学院大学文学部教授)